【助成施設訪問】

幼保連携型認定こども園 正和幼稚園

東京都町田市にある〈正和幼稚園〉には総額約１００万円を助成。同園は助成金で木製テーブルや椅子などの家具のほか、キンダーハープやモザイク柄の積み木など、楽器や玩具を購入した。

１９６０年代末、日本住宅公団（現・ＵＲ都市機構）が東京都町田市に開発した山崎団地は、住宅戸数が約３９００戸で最盛期には１万人以上が暮らしていた。そのマンモス団地の一角にある正和（せいわ）幼稚園は、団地で暮らす人たちのために開園し、56年の歴史がある。２０１９年に園舎・園庭を建て替え、２０２２年に幼稚園と保育所の機能を合わせもつ幼保連携型の認定こども園として生まれ変わった。今回より施設を充実するために、木製テーブルや椅子、ついたてなどの家具に加えて、楽器や玩具の助成を受けた。

同園では地域の子育て支援として園庭の開放を行っている。事前の予約は必要ない。平日10時から13時の間に、園を訪れれば、約７５０坪ある広い園庭で遊ぶことができる。園庭には、約８００本の木々からなる森や築山、水辺、そしてツリーハウスやビオトープなどがあり、子どもたちが思い思いに自然と触

園庭で遊ぶ子どもたち　築山を駆け上る子ども、ツリーハウスに隠れる子ども、落ちていた木の枝で絵を描く子ども。それぞれが自由な発想で遊んでいる。奥に見えるのは、山崎団地。

【正和幼稚園】
東京都町田市。学校法人正和学園が運営する幼保連携型認定こども園。２～５歳の２２８人が通う（２０２４年４月現在）。

れ合える環境になっている。

同園の地域の子育て支援は園庭開放にとどまらない。事前登録制で、月曜から金曜まで一時預かり保育を行っている。2歳から5歳の幼児に加えて、町田市に暮らす小学生を預かることもあるそうだ。

「園周辺には共働きの世帯が多くいます。夏休みなどで小学校がお休みのときには小学生も預かっています」と同園の大崎志保園長。

さらに、同園を運営する学校法人正和学園は、二つの認定こども園と、町田駅周辺の複数の小規模保育所を連携させて、〈つながり保育プロジェクト町田®〉というまちぐるみの新しい保育を行っている。

その新しい保育の取り組みの一つに、「送迎保育つながりバス」がある。町田駅周辺にある保育所などの一部を送迎ステーションとして利用し、駅周辺に暮らす子どもたちを郊外にある保育所まで運ぶ。電車で通勤する保護者にも助かるしくみだ。

その送迎ステーションには別の役割もある。送迎ステーションの一つ〈ラウンジ原町田〉は、使用していない時間帯を子育て中の親子同士がつながる場所として利用されている。ラウン

送迎ステーション〈ラウンジ原町田〉に遊びに来た親子　町田駅周辺に暮らす田中友里恵さん・結惺（ゆうせい）くん親子は、今回の助成対象であるレインボーカラーの塔や、キンダーハープなどで遊んでいた。ラウンジ原町田には保育士が常駐しているため、安心して遊ぶことができる。

ジが運営する〈子育てコミュニティ〉に登録すると、定期的に子育てに役立つ情報が届く。また、月に一度、管理栄養士や看護師などの専門家へ子育てを相談する機会もあるそうだ。

ところで、同園では、インクルーシブ保育を実践している。インクルーシブ保育とは、子どもの国籍や障がいの有無にかかわらず、同じ空間で生活・保育を行うこと。現在、同園には、発達障がいなど、さまざまな背景を持つ子どもたちが在籍している。

「違った特性を持った子どもが一緒に生活することで、多様性を認め合い、子どもたちのお互いを尊重する気持ちを育てていければと思っています」

インクルーシブ保育の質を高めるために、同園では団地にある商店街の空き店舗に、子どもの発達を支援する施設を新たに設置する予定だった。

しかし、商店街の空き店舗への利用希望者が多くいたため、今回は新施設の設置を断念することになってしまった。

「園の近くに施設があれば、園とその施設の2か所に送迎する保護者の負担が減りますし、新設することで園と情報共有がしやすくなります。それに在園児でない子どもの居場所として利用したり、地域の方々が気軽に立ち寄れるようにすることで、地域で一緒に子育てをしていける環境にしたいと思っていました。今回は残念ながら設置することはできませんでしたが、違う形で地域とともに子育てを実現していきます」

最後に大崎園長は、「子どもたちや保護者、保育者をはじめ、町田のまちで暮らすすべての人がつながって、まちぐるみで地域の子どもたちが育つ場をつくっていきます」と語った。

（文　佐藤修久／地人館）